

ラフ・ナ語の音素体系¹⁾

——ラフ・ナ語の記述——

桂 満 希 郎

Lahu-na phonemics — a descriptive study of the Lahu-na language in northern Thailand —

by

Makio KATSURA

ま え が き

本稿は1968年4月下旬より同5月上旬にかけて、タイ国最北端の町メーサーイ(Mae Sai)で行なった調査²⁾で得られた資料の一部を整理したものである。この調査は短期間のものではあったが、得られた資料の量は、私が1964年から1965年にわたり数カ月をかけて行なった調査で得たアカ語(Akhà)の資料³⁾をはるかに上まわるものであり、詳細な文法構造の記述を行なうにも充分なのであるが、それには多くの時間をかけて整理・検討したうえでなければ責任ある発表は出来ないため、本稿ではラフ・ナ(La[~] hu na[^])語の音素体系のみを記述し、ラフ・ナ語記述研究の第1としたい。

まず最初に、本論の中心とも言うべき音素体系の記述を行ない(Ⅰ章)、さらに、ここで用いた以外の分析方法について概略的に触れるであろう(Ⅱ章)。最後に、チェントウン(Kengtung)を中心に用いられてきたローマ字による正書法を中心として、これまでに行なわれてきたラフ・ナ語の研究について簡単に述べておく(Ⅲ章)。音素論は、音素目録、音素の分布、音素の各環境における音声学的記述より成る。

1) 今回の調査において多くの協力・援助を与えて下さった次の機関および個人に対し深く感謝する。
Provincial Office of Chiengrai, District Office of Maesai, District Office of Maechan, Chiengrai Hilltribe Welfare Settlement, Mr. Paul Ca Htaw, Mr. Paul Ca Law, Mr. Ca Shi, Mr. Pio Sam.

2) ラフ族、ラフ・ナ語について、また調査方法、インフォーマント等、一般的なことからについては、拙稿「再び北タイより—ラフ・ナ語の現地調査—」『東南アジア研究』第6巻第2号を参照。

3) アカ語の現地調査については、拙稿「アカ語の現地調査より」『東南アジア研究』第3巻第3号(1965年12月)を、アカ語については拙稿「アカ語アルー村方言の音素」『東南アジア研究』第4巻第1号(1966年6月)を参照。

言語の音素体系を記述する場合、その分析方法（あるいは分析過程における解釈の仕方）によって複数の正しい結果が得られるのはめずらしいことではないが、特にラフ・ナ語の音素体系はいろいろな解釈が成立し、そのいずれもが正しいと言える。私の記述においても、かなり思い切った決断を下さなければならぬ場合が多かった。従って、ここで用いた以外の方法についても、いちおう検討・評価しておくことが望ましい。これら数通りの解釈は、どれがよりすぐれているかという問題であって、どれが正しいとかまちがっているとかいうような問題ではない。例えば、ラフ・ナ語における [Cüe, Cũe, Cũa] (Cは子音を表わす) を /Cve, Cve, Cva/ と解する(α)か、/Cue, Cue, Cua/ と解する(β)かは、 α なら α に、 β なら β に徹底する限り、両者とも正しいといえる。もし β を α に訂正するならば、 β におけるすべての /-u-/ を /-v-/ に変えれば事足りるのである。ただし、一つの記述において、ある時は α を、ある時は β を用いたとしたら、これは誤りとみなさなければならない。⁴⁾

I 音 素 論

概 略

ラフ・ナ語の音素は、かぶせ音素 (suprasegmental phonemes)⁵⁾ および区分音素 (segmental phonemes, 以下単に音素と称する) に分けられる。かぶせ音素は、三つの強勢 (stresses), 六つの連結 (junctures), および六つの輪郭 (contours) より成り、音素は子音、母音、声調類より成る。六つの連結のうち、節 (clauses) の間にのみ立ち得る3個を節連結 (clause junctures), 句 (phrases) の間にのみ立ち得る2個を句連結 (phrase junctures), 音節 (syllables) の間にのみ立ち得る1個を音節連結 (syllable junctures) と称する。これらの連結はすべて開いた連結 (open junctures) であり、節連結と句連結とは休止点 (pause points) あるいは休止の可能な点 (potential pause points) であり、音節連結は音節構造 (syllable structure) により自動的に判明する。節は節連結によって囲まれ、それとそれに直前する音節の強勢により定まる輪郭によって特徴づけられ、句は句連結によって囲まれ、それとそれに直前する音節の強勢により定まる輪郭によって特徴づけられ、音節は音節連結によって囲まれ、強勢によって特徴づけられる。節連結とそれに直前する音節の強勢により定まる輪郭を節輪郭

4) 例えば, [lũe: 54] «泳ぐ» を /lue 54/ と解しておきながら, [šũe? 55] «すぐれている» を /šve? 55/ と解するような場合を指す。一つの [-ũ-] を /-u-/ と解した以上は, それ以外のすべての [-ũ-] をも同じく /-u-/ と解すべきだということである。

5) 以下の記述において, かぶせ音素に関する記述は試験的なものだと思っていただきたい。これの記述をするには, 音素の記述におけるよりも, より多くの自然な発話を分析する必要がある。未だ未整理の多量の資料に手を入れた際, ここに提した記述に補正を加えなければならない可能性は充分にあるだろう。また, 発話を特徴づけると考えられる抑揚 (intonations) についてあえて触れなかったのは, 記述をひかえ目にしておいたほうが, 後に補正を加える際により便利だと考えられるからである。なお, ここでは, 発話というのは, 節よりも一段上の単位と考え, 抑揚は発話輪郭 (utterance contours) とでも呼び得るであろう。

(clause contours), 句連結とそれに直前する音節の強勢により定まる輪郭を句輪郭 (phrase contours) と称し, それぞれ 3 個ずつ存在する。以上の諸関係をまとめると, ラフ・ナ語の発話 (utterances) は下図のような構造の連続より成り立つといえるであろう。ただし, 常に図のような 2 個ずつの対により成り立つとは限らない。

発						話					
節			節			節			節		
句		句連結	句		句連結	句		句連結	句		句連結
音節	音節		音節	音節		音節	音節		音節	音節	
強勢	強勢	連	強勢	強勢	連	強勢	強勢	連	強勢	強勢	連
声調	声調		声調	声調		声調	声調		声調	声調	
子音	母音	結	子音	母音	結	子音	母音	結	子音	母音	結

上図からもわかるように, この言語の音素は音節の分析により抽出することが出来る。従って, これらを記述するには音節を基準にするのが便利である。以下, 音節構造, かぶせ音素, 子音, 母音, 声調の順で記述を進める。⁶⁾

1. 音 節 構 造

$C_1(C_2)(V_1)V_2(C_3)T$ により表わすことが出来る。C は子音を, V は母音を, T は声調類をそれぞれ表わす。かつこの要素は, 時には起こり時には起こらないものを表わす。付せられた番号は, C_1 に立ち得る子音の中のある限られたものが C_2, C_3 に立つことが出来, V_2 に立ち得る母音のある限られたものが V_1 に立つことが出来るという意味である。 $C_1(C_2)-$ を初頭子音 (initial consonants), $-(V_1) V_2-$ を中核母音 (nuclear vowels), $-(C_3)$ を末尾子音 (final consonants), $-(V_1)V_2(C_3)$ を韻母 (finals) と称する。実際の言語においては上の式で表わされる音節構造の中で, 次の 5 通りのみが起こり得る。

- (1) C_1V_2T/khá/ [k'a[?] 55] 《十字弓》
- (2) $C_1V_2C_3T$/khay-/ [k'a : ē 33] 《告白する》
- (3) $C_1V_1V_2T$/buê/ [bũ^wε : 54] 《部屋》
- (4) $C_1V_1V_2C_3T$/kuân-/ [kũ^wâ : 54] 《統治する》
- (5) $C_1C_2V_2T$/pfû/ [p^βf^ʷ : 54] 《昆虫》

6) 音素, かぶせ音素といった言語の要素は同時に, あるいはほとんど同時に起こるものであるが, それらを文字通り同時に記述することは不可能であるから, 便宜上, かぶせ音素を先に取り扱う。例えば, 音節を構成する音素と切り離れた, 単なる強勢のみが実際の言語に起こるものではないが, 説明する際には, 他の要素からいちおう切り離された抽象的な強勢なりその他の要素なりを取り扱わなければならないのである。

2. かぶせ音素

音素が音節の分析により抽出されるのに対して、かぶせ音素は音節と音節との関係、すなわち、句とか節といったような音節よりも大きな単位の分析によらなければならない。逆に言えば、音節が連続して発せられた場合、それらの音節の長さ、声調の高さ (tone pitches), 輪郭 (tone contours) その他に現われる変化を分析することにより抽出されたものである。従って、ここでは、互いに対立するかぶせ音素を提出するにとどめ、それらの音声学記述は、後に声調類の項において、声調との関連において述べることにする。

2-1) 強勢：次の3個の強勢が対立する。

第Ⅰ強勢 /'—/ で表わす。/'laä've./ [la: 11 ve: 32]《来る》⁷⁾

第Ⅱ強勢 /'—/ で表わす。/'la,ve'thà.../ [la: 11 ve· 33 t'a? 11]《来るのを……》

第Ⅲ強勢 /(無記号)/で表わす。/'läve'lâ./ [la: 11 ve 11 la: 53]《来るか?》

2-2) 句連結：次の2個が対立する。

I /—,/ で表わす。/'că'thō, 'kay'gâ ve'lâ./ [tʃa 11 t'ɔ: 54 || qa·ě 33 ɣa: 55 ve 11 la: 53]《チャトー、行きたいか?》⁸⁾

II /—(スペース)/で表わす。/'că'thō 'kay'gâve'lâ./ [tʃa 11 t'ɔ: 55 | qa·ě 33 ɣa: 55 ve 11 la: 53]《チャトーは行きたがっているか?》

2-3) 節連結：次の3個が対立する。

I /—./で表わす。/'dà'jâ've./ [da? 11 dʒa: 55 ve: 32]《たいへん良い》

II /—!./で表わす。/'dà'jâ've!./ [da? 11 dʒa: 55 ve: 244]《たいへん良いなあ!》

III /—;/で表わす。/'dà'jâ've; 'ŋă 'dô've./ [da? 11 dʒa: 55 ve: 33 ŋa: 11 | do: 55 ve: 32]《たいへん良い、と私は思う》

2-4) かぶせ音素の分布について：上に提示した合計8個⁹⁾のかぶせ音素は、自由自在に現われるものではなく、それぞれ限定された分布を成す。すなわち、節連結に直前する音節は必ず第Ⅰ強勢を有し、句連結 /—,/ に直前する音節は必ず第Ⅰ強勢を有し、/—(スペース)/ に直前する音節は第Ⅰあるいは第Ⅲ強勢のいずれかを有し、音節連結に直前する音節は、第Ⅰ、第Ⅱ、第Ⅲ強勢のいずれかを有する。以上の分布状態から、(1) /'—./, (2) /'—!./, (3) /'—;/, (4) /'—,/ , (5) /'—/, (6) /—/, (7) /'—S/, (8) /'—S/, (9) /—S/¹⁰⁾といった組み合わせが得られる。(1)から(3)までを節輪郭、(4)から(6)までを句輪郭とする。(1)を終止型、(2)を感動型、(3)を連続型、(4)を休止型、(5)を持続型、(6)を弱まり型と称することにする。

7) /—./ その他の連結については後述する。

8) “||” はポーズを表わし、“|” は“||” よりも短いポーズを表わす。

9) ただ1個しかない音節連結は特に記述する必要がない。

10) “S” は音節連結を表わすが、これはただ1個だけしかなく、音節構造から自動的に判明するから、後続する音節そのものと考えてもよいだろう。

3. 子 音

下図の通り29(+1)個の対立がある。¹¹⁾

閉鎖音においては有聲・無聲の対立のほかに、無聲音の系列では出氣・無氣の対立があり、調音位置は最高6個にわたって対立を示している。鼻音は有聲音のみで、対立はもっぱら調音位置にのみよる。摩擦音は唇、硬口蓋、声門の3位置で対立し、前2者においては有聲・無聲の対立がある。破擦音は歯の位置のみであるが、有聲・無聲のほかに、無聲音においてはさらに出氣・無氣の対立がある。側音および転音は歯の位置に有聲音がただ1個あるだけである。閉鎖音において軟口蓋に加えて、後部軟口蓋 (back velar) が調音位置に加わる点は、例えばアカ語、リス語 (Lisou, Lisu)、ビルマ語等の同系言語と異なったおもしろい点であろう。¹²⁾

調音位置		唇	歯	硬口蓋	軟口蓋	後部軟口蓋	声門
閉鎖音	無聲・無氣	p	t	c	k	<u>k</u>	
	無聲・出氣	ph	th	ch	kh	<u>kh</u>	
	有聲	b	d	j	g	<u>g</u>	?
鼻音	有聲	m	n	ñ	ŋ		
摩擦音	無聲	f		š			h
	有聲	v		y			
破擦音	無聲・無氣		ts				
	無聲・出氣		tsh				
	有聲		dz				
側音	有聲		l				
転音	有聲		(r)				

3-1) 分布：1. にあげた音節構造において、子音のすべてが C_1- に立つことが出来るが、 $-C_3$ に立ち得る子音は /ŋ, y, v, k/ のみで、/k/ は /'laksə'ma./ [lak 33 sa 33 ma : 32]《大工(シャン語)》のみに現われる。 $-C_2-$ に立ち得る子音は /f, v, y/ のいずれかのみである。 $-C_2-$ が /f/ の時は、 C_1- は必ず /p, ph/ のいずれかであり、 $-C_2-$ が /v/ の時は、 C_1- は必ず /b, m/ のいずれかである。 $-C_2-$ が /y/ の時は、 C_1- は /ph, k/ のいずれかである。¹³⁾ また、/r/ はただ1例 /ʔa'raŋ./ [ʔa 33 rā : 32]《資本(シャン語)》にのみ現われる。以上のほかに、次のような分布上の限定が認められる。

11) 二つあるいはそれ以上の数の文字で表わしたものは、複数個の音素が結合したことを表わすのではなく、表記上の便宜のためにすぎない。また、()内は少数の限られた借用語にのみ現われるもので、ラフ・ナ語本来の音素体系から、多少とも、はずれるものである。

12) アカ語については前掲拙稿、リス語については西田龍雄「リス語の研究」『東南アジア研究』第5巻第3号(1967年12月)を参照。

13) /phy/の存在から */py, by, my/ 等も予想されるが、実際に私の調査ノートに見る限り、そのような例は見出すことが出来ない。

- (1) C_1C_2- が /pf, phf, bv, mv, phy, ky/ のいずれかである時は, $-V_1-$ あるいは $-C_3$ が満たされることはない。
- (2) C_1- が破擦音である時は, $-C_2-$, $-V_1-$, $-C_3$ が満たされることはない。
- (3) C_1- が /ñ/ の時は $-V_1-$, $-C_2-$, $-C_3$ が満たされることはない。
- (4) $-C_3$ が /y; v/ の時は, $-C_2-$, $-V_1-$ が満たされることはない。
- (5) $-V_1V_2-$ が /ue, uε/ の時は, $-C_2-$, $-C_3$ が満たされることはなく, /ua/ の時は, $-C_2-$ が満たされることはない。
- (6) $-V_2-$ が /i/ の時は $-C_2-$, $-C_3$ が満たされることはない。
- 以下に各子音の対立例を示しておく。

/pâ've./	《うすい》	/phâ'kû./	《脇腹》
/bâ've./	《からから》	/mâ've./	《多い》
/fâ've./	《かくす》	/vâ've./	《肥えている》
/ta've./	《置く》	/tha've./	《こぼす》
/dâ've./	《良い》	/nâ've./	《深い》
/la've./	《来る》	/ʔa'raŋ./	《資本》
/câ've./	《食べる》	/cha./	《女性性器》
/jâ've./	《非常に…だ》	/ša've./	《たやすい》
/yâ've./	《まちがう》	/ká've./	《寒い》
/Khâ've./	《(魚を)取る》	/ga've./	《助ける》
/ŋâ./	《魚》	/ka'lè./	《通過証》
/khâ've./	《にがい》	/gâ've./	《勝ちとる》
/ʔa'pě./	《アヒル》	/ha've./	《貧乏だ》
/pfû./	《昆虫》	/phfû've./	《逆向ける》
/bvû've./	《書く》	/mvû./	《茸》
/ʔǒ'phyû./	《色》	/mé'kyö./	《眼鏡》
/tsu./	《市場》	/tshû've./	《洗う》
/dzû./	《酒》	/kay've./	《活発だ》
/kãŋ./	《仕事》	/kav've./	《宣する》
/laksa'ma./	《大工》	/ñi've./	《赤い》

3-2) 音声学的記述: これは, いわば, どのような過程を経て 3. のような結果に至ったかという説明ともいえるであろう。

(1) 唇子音

/p/: 常に無声無気の両唇閉鎖音 [p] である。/pa've./ [pa : 22 ve : 32]《交換する》,

/puê./ [pũɛ: 53] 《祭事》。

/ph/: /—V/, および /—f/ においては常に無声出気の両唇閉鎖音 [p'] である。
/phû've./ [p'ũ: 55 ve: 32] 《あおぐ》, /'phfû've./ [p'fɸ: 55 ve: 32] 《逆向ける》。
/—y/ においては、硬口蓋化された無声出気の両唇閉鎖音 [p'] である。/?ð'phyũ./ [ʔo
11 p'ju: 55] 《色》。

/b/: 常に有声の両唇閉鎖音 [b] である。/'bũ've./ [bu: 11 ve: 32] 《沸騰する》, /'buê./
[bũɛ: 53] 《部屋》, /'bvû've./ [byʔ 11 ve: 32] 《書く》。

/m/: /—V/ においては常に有声の両唇鼻音 [m] である。/'mu./ [mu: 32] 《野生のイ
モ》。/mv/ は常に [m] である。/'mvũ./ [m: 11] 《茸》。

/f/: /—V/ においては常に無声の唇歯摩擦音 [f] である。/'fu've./ [fu: 22 ve: 32]
《送る》。/p—w/ および /ph—w/ においては [ɸ] である。/'pfû've./ [p'fɸ: 55 ve: 32]
《(剣を) 帯びる》, /?ð'phfû./ [ʔo 11 p'fɸ: 53] 《値打ち》。

/v/: /—V/ においては有声の唇歯摩擦音 [v] である。/'vû've./ [vuʔ 11 ve: 32] 《(ズ
ボン等を) はく》。/b—w/ においては [v] である。/'bvû've./ [byʔ 11 ve: 32] 《書く》。
/m—w/ においてはゼロとなる。/'mvû'mĩ./ [m: 55 mi: 11] 《土地》。末尾子音、すな
わち、/V—/ においては [ɔ̃] ないしは [õ] である。/'kav've./ [ka:õ 22 ve: 32] 《宣する》。

(2) 歯 子 音

/t/: 常に無声無気の歯裏閉鎖音 [t] である。/'tð've./ [tɔ: 11 ve: 32] 《平らだ》, /'tue'
muŋ./ [tũɛ 11 mũ: 53] 《パイナップル》。

/th/: 常に無声出気の歯裏閉鎖音 [t'] である。/'thð've./ [t'ɔ: 55 ve: 32] 《触れる》,
/'thue've./ [t'ũɛ: 22 ve: 32] 《こする》。

/d/: 常に有声の歯裏閉鎖音 [d] である。/'dð've./ [dɔ: 55 ve: 32] 《思う》。

/n/: 常に有声の歯裏鼻音 [n] であり、/—i/ においても口蓋化されることはない。
/'nð've./ [nɔ: 55 ve: 32] 《目ざめる》, /'ni'ma./ [ni: 22 ma: 32] 《心》。

/ts/: 常に無声無気の歯裏破擦音 [ts] である。/'tsu./ [tsɸ: 32] 《市場》。

/tsh/: 常に無声出気の歯裏破擦音 [ts'] である。/'tshû've./ [ts'ɸ: 55 ve: 32] 《(布類を)
洗う》。

/dz/: 常に有声の歯裏破擦音 [dz] である。/'dzũ./ [dzɸ: 11] 《酒》。

/l/: 常に有声の歯裏側音 [l] である。/'lð've./ [lɔ: 55 ve: 32] 《加える》, /'luê've./ [lũɛ:
55 ve: 32] 《泳ぐ》。

/r/: 常に有声の歯茎はじき音 [r] であり、ただ 1 例だけが見出される。/?a'raŋ./ [ʔa 22
rũ: 32] 《資本》。

以上の歯子音における破擦音の系列は、/—w/ ([ɸ~ɸ']) 以外には起こらないという極めて
限定された分布を成しているために、/t, th, d/ あるいは後述する /c, ch, j/ の異形態 (allo-

phones) ではないかという問題が出てくるが、いずれも /—u/ に現われるため、相補的分布を成さず、やはり独立した音素として設定しなければならない。下の例から明らかであろう。

/tsu./ 《市場》 : /cũ./ 《種類》 : /tũ-/ 《咲く》
 /tshũ-/ 《洗う》 : /chũ-/ 《秀でる》 : /thũ./ 《森》
 /dzũ./ 《酒》 : /jũ-/ 《たえる》 : /dũ-/ 《つぶやく》

(3) 硬口蓋子音

/c/: 常に無声無気の硬口蓋破擦音 [tʃ] である。/câ've./ [tʃa: 55 ve: 32] 《食べる》。

/ch/: 常に無声出気の硬口蓋破擦音 [tʃʰ] である。/cha./ [tʃa: 32] 《女性の生殖器》。

/j/: 常に有声の硬口蓋破擦音 [dʒ] である。/jê've./ [dʒe: 55 ve: 32] 《とどまる》。

/ñ/: 硬口蓋鼻音の [ɲ] であるが、/—i/ にのみ現われる。/ñi've./ [ɲi: 22 ve: 32] 《赤い》。極めて限定された分布を成すが、/nî./ [ni: 53] 《二》のような例が存在する事実から、/n/ の異形態とみなすことは出来ない。/ñ/ は /i/ 以外の母音の前に立つことは無いけれども、/—i/ においては、/n, ñ/ は対立し、相補的分布を成さないからである。

/š/: /—i, e, ε, ue/ においては、無声の有溝 (grooved) 硬口蓋摩擦音 [ʃ] である。/ši./ [ʃi: 32] 《金》, /še./ [ʃe: 32] 《シラミ》, /še've./ [ʃe: 22 ve: 32] /šue've./ [ʃũʷe? 55 ve: 32] 《すぐれている》。/—u, o, ɔ/ においては、無声の有溝のそり舌歯茎摩擦音 [ʃ] である。/šũ./ [ʃu: 55] 《タバコ》, /šo./ [ʃo: 32] 《鉄》, /šɔ./ [ʃɔ: 53] 《かぎ》。/—u/ においては無声の歯茎摩擦音 [s] である。/su've./ [sʷ: 22 ve: 32] 《死ぬ》。/—a/ においては自由交替的に [ʃ] あるいは [s] である。/ša./ [ʃa: 32] ~ [sa: 32] 《肉》。

/y/: /—e, ε, a, u, o, ɔ/ においては有声の硬口蓋摩擦音 [j] である。/yê've./ [je: 11 ve: 32] 《しっかりしている》, /yě./ [je: 11] 《家》, /yà've./ [ja? 11 ve: 32] 《まちがう》, /yũ've./ [ju: 11 ve: 32] 《取る》, /yö./ [jo: 11] 《はい (Yes)》, /yô./ [jo: 53] 《(第三人称代名詞)》。/—i/ においては有声の歯茎硬口蓋摩擦音 [ʒ] である。/yiŋ'tsũ've./ [ʒi: 33 tsʷ: 55 ve: 32] 《印を押す》。/—u/ においては有声の歯茎摩擦音 [z] である。/yu./ [zʷ: 11] 《オオムギ》。/ph, k—/ においては前の子音 /ph, k/ を口蓋化する。/ʔə'phyũ./ [ʔɔ 11 p'ju: 55] 《色》, /m'é'kyö./ [mɛ? 55 k'jo: 11] 《眼鏡》。末尾子音として、すなわち /V—/ においては [ẽ] ないしは [ē] である。/kăy've./ [ka: ẽ 11 ve: 32] ~ [ka:ē 11 ve: 32] 《活発だ》。

以上の硬口蓋子音において /c, ch, j/ は音声学的には [tʃ, tʃʰ, dʒ] という破擦音であるが全体の分布状況からみて、これらは音素論的には閉鎖音の系列に入るとみるべきものである。下のような分布関係を考えると、硬口蓋音に出来たすき間(“—”)が、これら3個の音素によって占められることにより、均整のとれた音素分布を設定することが出来るからである。

/p	t	—	k
ph	th	—	kh
b	d	—	g
m	n	ñ	ŋ/

(4) 軟口蓋子音

/k/: /—V/ においては無声無気の軟口蓋閉鎖音であるが、後続する母音によって調音位置がわずかに前後する。/'kîŋ've./ [kî: 55 ve: 32]《張っている》, /'kũ've./ [kũ: 11 ve: 32]《まねく》。/—y/ においては口蓋化された [kʲ] である。/'mÉ'kyö/ [mɛ? 55 kʲo: 11]《眼鏡》。末尾子音として、すなわち /V—/ においては、破裂を伴わない軟口蓋閉鎖音 [kʰ] である。/'kaksa'ma./ [lakʰ 33 sa 33 ma: 32]《大工》。

/kh/: 摩擦音 [x] を伴った無声出気の軟口蓋閉鎖音で、[kx] で表わされ得る破擦音と言えるであろう。後続する母音によって、[kʰx] から [kʰç] の間で多少とも調音位置が前後する。/'khĩ'tù./ [kʰçi: 11 tu? 11]《レプラ》, /'kho./ [kʰxo: 32]《庭》。

/g/: 常に有声の軟口蓋摩擦音 [ɣ] であるが、後続する母音により、調音位置がわずかに前後する。/'gâ've./ [ɣa: 55 ve: 32]《欲する》, /'gu've./ [ɣu: 22 ve: 32]《直す》。

/ŋ/: /—V/ においては常に軟口蓋鼻音 [ŋ] である。/'ŋâ./ [ŋa: 53]《魚》。末尾子音としては、すなわち /V—/ においては、前行する母音を鼻音化するが、それ自身としては、積極的に音素としての性格を有しない。/'kāŋ./ [kā: 55]《仕事》。

軟口蓋子音の /k, kh, g/ は音声学的には、それぞれ [k, kʰx, ɣ] であるが、(3)の硬口蓋子音について述べたと同様の音素分布の均整という理由で、これらを閉鎖音の系列に入れるべきである。以下の各音素についても同様である。

(5) 後部軟口蓋子音

/k/: 常に摩擦音 [x] を伴った無声無気の後部軟口蓋破擦音 [qɰ] である。/'kay've./ [qɰa: 22 ve: 32]《行く》。

/kh/: 常に摩擦音 [x] を有する無声出気の後部軟口蓋破擦音 [qʰx] である。/'khâ've./ [qʰɰa: 55 ve: 32]《にがい》。

/g/: 常に有声の後部軟口蓋閉鎖音 [G] であるが、自由交替的に [R] になることがある。/'gâ./ [Ga: 53] ~ [Ra: 53]《オオムギ》。

(6) 声門子音

/ʔ/: /—V/ においては、声門閉鎖音 [ʔ]; /—V/ においては、声門の緊張 (glottal constriction) [ʔ]; /—V/ においてはゼロである。/'ʔu've./ [ʔu: 22 ve: 32]《大きい》, /'ʔo'mɛ./ [ʔo: mɛ: 32]《名前》, /ʔaʃu./ [a 33 ʃu: 32]《誰?》。

/h/: 常に無声の声門摩擦音 [h] である。/'ha've./ [ha: 22 ve: 32]《貧しい》。

4. 母 音

右図のごとく9個の母音が対立する。各母音は、舌の高さ（高，中，低），舌の高まる位置（前，中，奥）および唇の形（平口，円口）によって定義づけられる。¹⁴⁾ 前舌母音，中舌母音，奥舌母音共に，高・中・低の三つにわたって対立するが，前舌はすべて平口，奥舌はすべて円口である。¹⁵⁾

位置 唇の形 さ	前	中	奥
	平	平	円
高	i	ɨ	u
中	e	ɯ	o
低	ɛ	a	ɔ

・低の三つにわたって対立するが，前舌はすべて平口，奥舌はすべて円口である。¹⁵⁾ /i/ は極めて低い頻度の音素であり，元来は /i/ であったものの多くが現在では /ɯ/ に変化してしまっているのではないかと考えられる。/i/ の /ɯ/ への同化は今でもその過程が続いており，やがては /i:/ /ɯ/ の区別がなくなるのではなかろうか。¹⁶⁾ しかし，この /i/ は，頻度も低く，したがって機能度も低い（low function）ものではあるが，借用語ではない基本的な語彙に現われ，その点子音における /r/ とは異なり，やはり言語の音素体系の一部を占めるものとみなされるべきである。

4-1) 母音の分布： 次のような分布上の限定がある。

(1) C_1C_2- が /pf, phf, bv, mv/ のいずれかである時は， $-V_1-$ ， $-C_3$ が満たされることはなく， $-V_2-$ は必ず /ɯ/ である。

(2) $-V_1-$ は必ず /u/ であり，その際は $-V_2-$ は必ず /e, ɛ, a/ のいずれかであり， $-C_2-$ が満たされることはない。音節主音は /e, ɛ, a/ である。

(3) C_1- が破擦音の時は， $-V_1-$ が満たされることはなく， $-V_2-$ は必ず /ɯ/ である。

(4) C_1C_2- が /phy, ky/ の時は $-V_1-$ が満たされることはない。

(5) C_1- が /ñ-/ の時は $-V_1-$ が満たされることはなく， $-V_2-$ は必ず /i/ である。

(6) $-C_3$ が /y/ の時は， $-V_1-$ が満たされることはなく， $-V_2-$ は必ず /a, o/ のいずれかである。

(7) $-C_3$ が /v/ の時は， $-V_1-$ が満たされることはなく， $-V_2-$ は必ず /a/ である。

以下に母音の対立例を提出する。以上にのべた限定は一般的なものであるが，実際に個々の例としてどのような形が存在するか，あるいは存在しないかという点については，次に提する韻母表を参照すればある程度助けとなるだろう。¹⁷⁾

14) 唇の広さということも母音の定義づけに関係してくるが，これは舌の高さと平行するため，いずれか一方を取り上げるだけで充分である。すなわち，舌の高さが高いほど唇の広さはせまくなり，低くなるほど後者は広くなる。したがって，いずれか一方を述べれば，残りの一方は自動的に判明するのである。

15) ここで言う母音の定義は音素分布における互いのハライイから見たそれであって，音声学的な事実にもとづいたものではないことを断わっておく。

16) この推定を支える根拠の一つは，Ⅲ章において述べるであろう。

17) この表以外の例が出てくる可能性が全然ないとは言えないが，その可能性は極めて少ないと言えよう。また，ラフ・ナ語の音節表をも作ってあるが，これについては，また追加すべき形が出てくる可能性があるので，現段階では発表をひかえる。

/phi'ba've./	《ふりまわし切る》	/phè've./	《ツバを吐く》
/phê've./	《放つ》	/phā'cè./	《タオル》
/phî./	《犬》	/phû've./	《あおぐ》
/phu./	《銀》	/phò've./	《ふくらむ》
/pho've./	《開く》	/puê./	《祭事》
/thuě've./	《こする》	/ʔa'khuǎŋ./	《許可》

韻母表

中核母音	末尾子音	-ゼロ	-ŋ	-y	-v	-k
-i-		-i	-iŋ			
-e-		-e	-eŋ			
-ε-		-ε	-εŋ			
-i-		-i				
-u-		-u	-uŋ			
-a-		-a	-aŋ	-ay	-av	(-ak)
-u-		-u	-uŋ			
-o-		-o	-oŋ	(-oy)		
-ɔ-		-ɔ	-ɔŋ			
-ue-		-ue				
-uε-		-uε				
-ua-		-ua	-uaŋ			

4-2) 音声学的記述：

(1) 前舌母音

/i/: 平口高舌（狭口）母音 [i] であるが、/—ŋ/ においては [i] である。/出気音—/ においては、わずかに無声化して [i̥] である。/pî've./ [pi: 55 ve: 32]《与える》, /kîŋ've./ [kî: 22 ve: 32]《張っている》, /thî've./ [tʰi: 11 ve: 32]《ふみつぶす》

/e/: 平口中高舌（半開）母音 [e] であるが、/—ŋ/ においては [ẽ] である。/te've./ [te: 22 ve: 32]《する》, /vêŋ./ [vê: 53]《町》。第V声調 (/˥/) および第VI声調 (/˨/) を有する音節において、その音節が第I強勢を有する時は、わずかに二重母音化して [eʲ] となる。/thé've./ [tʰeʲ? 55 ve: 32]《ける》。/u—/ においては、渡り音 [w] が現われ、またわずかに前寄りに狭くなる。/thuě've./ [tʰũwɛ 11 ve: 32]《こする》。

/ε/: 平口の低舌（広口）母音 [ε] である。/te've./ [te: 22 ve: 32]《たたむ》。/—ŋ/ においては、[ɛ] である。/cěŋ./ [tʃɛ: 11]《たいこ》。/u—/ においては、渡り音 [w] が現われ、わずかに広くなる。/luê've./ [lũwɛ: 55 ve: 32]《泳ぐ》

(2) 中舌母音

/ɨ/: 平口の高舌（狭口）母音 [ɨ] である。/出気音—/ においては、わずかに無声化して [ɨ̥] である。また第I強勢を有する音節においては、わずかに二重母音化して [ɨʲ] で

ある。/'kɪ:/ [kɪ: 32]《寝床》, /'phɪ:/ [pʰɪ: 53]《犬》。

/ɯ:/ 平口高舌（狭口）奥舌母音であるが、標準母音の [u] よりはやや低く、中よりである。この点を考慮に入れて、4. におけるような音素論的配分を設定したのである。/—ŋ/ においては [ũ] である。/pf, phf—/では [ʷ~ʷ] である。また /bv, mv—/ ではゼロである。/破擦音—/では [ʷ~ʷ] である。/'pu'ʷve./ [pu: 22 ve: 32]《送る》, /'lũŋ' ve./ [lũ: 55 ve: 32]《忘れる》, /'phfũ./ [pʰfʷ: 53]《昆虫》, /'tshũ've./ [tsʷ: 55 ve: 32]《洗う》, /'bvũ've./ [bvʷ 11 ve: 32]《書く》, /'mvũ./ [mʷ: 11]《茸》。

/a:/ 平口低舌（広口）母音 [a] である。/—ŋ/においては [ã], /u—/ においては、渡り音が現われて [ʷa] となる。/'pã've./ [pã: 55 ve: 32]《うすい》, /'pãŋ'tây./ [pã: 55 tã:ẽ 53]《ウサギ》, /'kuãŋ've./ [kũʷã: 55 ve: 53]《統治する》。

(3) 奥舌母音

/u:/ 円口高舌（狭口）母音 [u] であり、/—ŋ/ においては [ũ] である。/'tũ've./ [tu: 55 ve: 32]《ちかう》, /'thuŋ./ [tũ: 32]《マナーオ》。

/o:/ 円口中舌（半開）母音 [o] であり、/—ŋ/ では [õ], また第V声調あるいは第VI声調を有する音節において、その音節が第I強勢を伴う場合は、わずかに二重母音化して [oʷ] となる。/'põ've./ [po: 11 ve: 32]《飛ぶ》, /'põŋ've./ [põ: 11 ve: 32]《にげる》, /'pó've./ [poʷ? 55 ve: 32]《爆発する》。

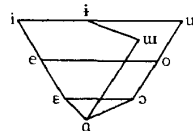
/ɔ:/ 円口低舌（広口）母音 [ɔ] であり、/—ŋ/ では [õ] である。/'tõ./ [tɔ? 11]《吸血コウモリ》, /'thõŋ./ [tõ: 32]《かんどく》。¹⁸⁾

5. 声調類

1 個の音節は必ず 1 個の声調を有するのであるが、実際の言語において、かぶせ音素を除いた単なる音節だけが発せられることがあり得ない以上、音節の声調もかぶせ音素との関係においていろいろと変化し、ある場合には、声調の対立がなくなる (neutralized) こともある。いろいろな環境における声調を 1 個ずつ取り上げたのでは記述を複雑にするだけであるから、まず、1 個の音節が独立して発せられる場合、すなわち、第I強勢を伴い節連結 (/—./) を有する

18) これら 9 個の母音を音声学的特徴によって配列すると右図のようになるであろう。/ɯ/ を /e—o/ の線上に置くことにより、均整ある分布を設定出来る。

19) /'—./ という節輪郭を伴うことは、その音節が節であることを意味するが、ただ 1 個の音節であっても、節として現われてさしつかえない。節であるかどうかは音節の数で決まるのではなく、節連結により後続され、それとそれに直前する音節の強勢との組合せである節輪郭を有しているかどうかで決まるのである。例えば /?a'su 'kayle./ 《誰が行くか?》に対する返答 /'yô./ 《彼(が行く)》はただ 1 個の音節であるが、/—./ という節連結を有し、/'—./ という節輪郭を伴うから節である。同じ音節でも、/'yô 'kayve'lâ./ 《彼が行くのか?》においては、/(スペース)/ という句連結を有し、/'—/ という句輪郭を伴うから、これは句である。



場合(言いかえれば終止型節輪郭を有する場合)の声調を基本的なものとして記し、ついでそれらが他の環境においては(他のかぶせ音素と共に起こる場合には)どのように変化するかというように論を進める。¹⁹⁾以上の基本的な場合(/'ー/)においては、次の6個の声調が対立する。

I. 中平型 [32~33↓] ……………/(無記号)/で表わす。

II. 低平型 [11~11↓] ……………/˘/ で表わす。

III. 高平型 [55] ……………/ˊ/ で表わす。

IV. 高降型 [53~54] ……………/ˋ/ で表わす。

V. 低止型 [11?] ……………/˙/ で表わす。

VI. 高止型 [55?~54?~55?↓] ……………/ˑ/ で表わす。

以上の声調類の中で、I, II, III, IVは長く、V, VIは短い。前4者においては、それぞれ、「中・平」、「低・平」、「高・平」、「高・降」を弁別の特徴(distinctive features)とし、後2者においては「低・止」、「高・止」を弁別の特徴とする。「長いこと」はI, II, III, IVの、「短いこと」はV, VIの、自動的特徴(automatic features)とする。²⁰⁾

5-1) 声調類の分布：声調類 V, VIは -C₃ の満たされた音節(末尾子音を有する音節)には起こらないという点以外には、一般的な分布上の限定はない。以下に対立例を示す。

/'na./ [na: 33↓] 《聞け》

/'lǎ./ [la: 11↓] 《茶》

/'nā./ [na: 55] 《深い》

/'lā./ [la: 53~54↓] 《トラ》

/'lǎ./ [la? 11] 《手》

/'ná./ [na? 55] 《黒い》

5-2) 音声学記述：

(1) /(無記号)/(:i) /'ー/ においては、中ごろから出発、終りに弱まりながら少し下がり気味となる。音節は [4] の長さを有する。[33↓w4]。²¹⁾/'phu./ [p'u: 33↓w4]《銀》。ii) /'ー! / では、やや低目から出発、中ごろで高まってその高さが維持されるが、終りに弱まる。音節は [5] の長さを有する。[23↑w5]。/'dà've! / [da? 11 ve: 23↑w5] 《良いなあ！》。iii) /'ー;/ では、中ごろから出発、徐々に弱まるが、下がりには伴わない。音節は [3] の長さを有する。[33w3]。/'dà'

20) “↓”はそれを伴う声調が非弁別的な(nondistinctive)下がりに伴うことを表わす。例えば、[33↓]は中平型であり、終りに向かってわずかに下がるが[32]で表わすほどその下がりが著しくないことを示す。

21) “w”は「弱まりを」、「↓」は「下がり」を、「↑」は「上がり」を、最後の数字は音節の長さを、それぞれ表わす。また、問題となる個所に対してのみ、これらの記号を用いた詳しい記述を行ない、他の個所については、簡略に書き表わしておく。なお、声調類、かぶせ音素に関しては、録音した自由会話をインフォーマントの助けを得て表記したものをもとにしたのである。

ve; 'ŋǎ'dǒ've./ [daʔ 11 ve: 33w3 ɲa: 11 dɔ: 55 ve: 33↓w4] 《良いと、私は思う》。iv) /'—/ では、中ごろから出発、終りに弱まるが下がりには伴わない。音節は [4] の長さを有し、休止 [||] が伴う。[33w4 ||]。/cǎ'lo, 'kayve'lâ./ [tʂa 11 lo: 33w4] qxa:ẽ 33 ve 33 la: 53] 《チャロー、(君は)行くか?》v) /'—/ および /'—S/ においては、単なる中平型で弱まりあるいは下がりを伴わない。音節は [3] の長さを有し、前者においては、休止 [|] を伴う。[33.3] ~ [33.3 |] /cǎ'lo 'kayve 'lâ./ [tʂa 11 lo: 33.3 | qxa:ẽ 33 ve 33 la: 53] 《チャローは行くか?》。/cǎ'lo'lâ./ [tʂa 11 lo: 33.3 la: 53] 《チャローか?》。vi) /'—s./ において /s./ が第I声調の時は、[22] であり、下がりあるいは弱まりを伴わない。音節は [3~2] の長さを有する。/cǎ'lo 'kay've./ [tʂa 11 lo: 33.3 | qxa:ẽ 22 ve: 33↓w4] 《チャローは行く》。vii) /'—/ および /'—S/ においては、/S/ が第I, III, IV, VI声調類を有する時は、単なる低平型 [11] であり、音節は [1] の長さを有する。前者においては休止 [||] を伴う。[11.1 |] ~ [11.1] その他の場合は中平調 [33] である。/cǎ'lo'lo 'kay've./ [tʂa 11 lo: 33.3 lo 11.1 | qxa:ẽ 22 ve: 33↓w4] 《チャロー(の所)へ行く》。

(2) /'/: i) /'—/ では、低い点より出発、終りに弱まりながら下がり気味となる。音節は [4] の長さを有する。[11↓w4]。/'yǒ./ [jo:11↓w4] 《はい(yes)》。ii) /'—! / では、低より出発、中ごろで中程度まで上がり、そのままの高さを保つが、次第に弱まる。音節は [5] の長さを有する。[13w5]。/'dǎ'jǎve'yǒ! / [daʔ11 dʒa: 55 ve 11 jo: 13w5] 《たいへん良いなあ!》iii) /'—; / では、低い点より出発、徐々に弱まるが下がりには伴わない。音節は [3] の長さを有する。[11w3]。/'dǎve'yǒ; 'ŋǎ 'dǒ've./ [daʔ11 ve 33 jo: 11w3 ɲa: 11 dɔ: 55 ve: 33↓w4] 《良いと、私は思う》。iv) /'—/ では、低より出発、徐々に弱まるが、下がりには伴わない。音節は [4] の長さを有し、休止 [||] が現われる。[11w4 ||]。/'câtũ mâ'cǒ, 'dǒtũ mâ'cǒ./ [tʂa: 55 tu 11 | ma 55 tʂɔ: 11w4 || dɔ: 11 tu 11 | ma 55 tʂɔ: 11↓w4] 《食べ物もないし、飲み物もない》。v) /'—/ および /'—S/ では、単なる低平調で弱まりや下がりには伴わない。音節は [3] の長さを有し、前者においては、休止 [|] が現われる。[11.3 |], [11.3]。/'ŋǎ 'dǒ've./ [ɲa: 11.3 | dɔ: 11.3 ve: 33↓w4] 《私は飲む》。vi) /'—s/ では、単なる低平調で、音節は [2] の長さを有する。[11.2]。/'mvũ,mĩ'yâ./ [ʔm: 55 mi:11.2 ja: 53] 《土地の人間》。vii) /'—/ および /'—S/ においては単なる低平調で、前者においては休止 [|] が現われる。音節は [1] の長さを有する。[11.1], [11.1 |]。/'câtũ mâ'cǒ./ [tʂa: 55 tu 11.1 | ma 55 tʂɔ: 11↓w4] 《食べ物がない》、/'câtũve yǒ'cê./ [tʂa: 55 tũ 11.1 ve 33 jo: 11.1 tʂe: 53] 《食べるとのことだよ》。

(3) /'—/ : i) /'—/ では、高平調で終りに徐々に弱まる。音節は [4] の長さを有する。[55·w4]。/'kǎŋ./ [kǎ: 55·w4] 《仕事》。ii) /'—! / では高平調で、終りにわずかに高めを伴うことがある。音節は [5] の長さを有する。[55↑5]。/'hĩ! / [hi: 55↑5] 《八?!》。iii) /'—; / では、高平調で、終りに徐々に弱まる。音節は [3] の長さを有する。[55·w·3]。/'hĩ; 'ŋǎ 'dǒ've./ [hi: 55w·3 ɲa: 11 dɔ: 55 ve: 33↓w4] 《八だと、私は思う》。iv) /'—/ では、高平調で、音節は [4]

の長さを有し、休止 [||] が現われる。[55:4 ||]。/chi'thà pa'to'lē, 'ŋǎ mǎ'kay'gā'və./ [tʃ'i: 33 t'a? 11 pa 11 to: 33 lē: 55:4 || ŋa: 11 | mǎ 55 q'a.ē 33 ɣa: 55 ve: 33↓w:4] 《これゆえに、私は行きたくないのだ》。v) /'—/ および /'—S/ においては高平調であるが弱まりを伴わない。音節は [3] の長さを有し、前者においては休止 [|] が現われる。[55:3], [55:3 |]。/'hi'khe'lā./ [hi: 55:3 k'xε: 33 la: 53] 《八頭か?》, /'yô 'ŋǎ'a'kē 'ʔuue'yō./ [jo: 55 | ŋa: 11 a 11 kε: 55:3 | ʔu: 11 ve 33 jo: 11↓w:4] 《彼は私よりも大きいんだ》。vi) /'—s/ では高平調で、音節は [2] の長さを有する。[55:2]。/'a,yē'yē./ [a 11 jε: 55:2 jε: 55:w:4] 《ゆっくりと》。vii) /—/ および /—S/ においては高平調で、音節は [1] の長さを有する。前者においては休止 [|] が現われる [55:1], [55:1 |]。/'ā'phē./ [a 55:1 p'ε: 55:4] 《キュウリ》。

(4) /˘/: i) /'—./ では、高降調で終りに弱まりを伴う。音節は [4] の長さを有する。[53 w:4]。/'cǎ'thō./ [tʃa 11 t'ɔ: 53w:4] 《チャトー(人名)》。ii) /'—!./ においては、高降調であるが中ごろに上がり調を伴う。音節は [5] の長さを有する。[5↑3:5]。/'kayve 'lā./ [q'a.ē 33 ve 33 la: 5↑3:5] 《行くのか》。iii) /'—/ では、高より出発、終りに徐々に弱まる。下がり調を伴うが、i), ii) におけるほど著しくはなく、[55↓] あるいは [54] で表わすことが出来る。音節は [3] の長さを有する。[54~55↓w:3]。/'cǎ'thō; 'ŋǎ 'dō've./ [tʃa 11 t'ɔ: 55↓w:3 ŋa: 11 | dɔ: 55 ve: 32] 《チャトーだと、私は思う》。iv) /'—/ では、はっきりとした下がり調で、休止 [||] を伴う。音節は [4] の長さを有する。[53:4 ||]。/'cǎ'thō, 'kayve'lā./ [tʃa 11 t'ɔ: 53 || q'a.ē 33 ve 33 la: 53:w:4] 《チャトー、(君は)行きたいか?》。v) /'—/ および /'—S/ においては、高平調で音節は [3] の長さを有する。前者においては、休止 [|] を伴う。[55:3], [55:3 |]。/'cǎ'thō 'kay'gāve 'lā./ [tʃa 11 t'ɔ: 55:3 | q'a.ē 33 ɣa: 55:3 ve 33 la: 53.] 《チャトーは行きたがっているか?》。vi) /'—s/ においては高平調で音節は [2] の長さを有する。[55:2]。/'nû, ʔô, vetê'khe./ [nu: 55↓'o:55:2 ve:33:2 te 55:1 k'xε: 32] 《あの1頭のウシ》。vii) /—/ および /—S/ においては、高平調で音節は [1] の長さを有し、前者においては休止 [|] が現われる。[55:1], [55:1 |]。/'tê'khe'lā./ [te 55:1 k'xε: 33 la: 53] 《1頭か?》。

(5) /˘/: i) /'—./, /'—!./, /'—;/, /'—s/ /'—./, /'—/ においては強い声門閉鎖音を伴った低平調 [11?] である。後2者では、それぞれ、休止 [||], [|] が現われる。²²⁾ /cǎ'fà 'yà'kay've./ [tʃa 11 fǎ? 11 | jǎ? 11 q'a.ē 22 ve: 33↓] 《チャファッは下って行く》。ii) /'—s/ では弱い声門緊張を伴った低平調 [11'] である。/'chi've ,thàpa'to'yō./ [tʃ'i: 33 ve 33 t'a? 11 pa 33 to: 33 jo: 11↓] 《このため(なの)だよ》。iii) /—/, /—S/ においては単なる短い低平調 [11] である。/'lò'ʔeve'lā./ [lo 11 ʔe: 33 ve 33 la: 53] 《はいるか?》。

(6) /˘/: i) /'—./, /'—!./, /'—;/, /'—./, /'—/ においては声門閉鎖を伴った高平調 [55?]

22) 第Vおよび第VI声調においては、音節の長さは常に短いから、特に記述の対象とする必要はない。

であり、後2者においては、それぞれ休止 [||], [|] が現われる。/cǎ'vá 'ná 'bóve'lâ./ [tʂa 11 vaʔ 55 | naʔ 55 | boʔ 55 ve 11 la: 53]《チャヴァッは鉄砲をうつか?》。ii) /'—'s/ においては、わずかな下がり調を伴った [55ʔ↓] である。/'fá'thà 'bóve'lâ./ [faʔ 55↓ t'aʔ 11 | boʔ 55 ve 11 la: 53]《ネズミをうつか?》。iii) /—s/ では声門緊張を伴った高平調 [55'] である。/'bú' bǎ've./ [buʔ 55 ba: 11 ve: 33↓]《(槍などを)つき出す》。iv) /—/, /—s/ では、単なる高平調 [55] である。/'tá'ʔe've./ [ta 55 ʔe: 22 ve: 33↓]《登る》。v) /s'—/, /s'—/, /s'—/ においては、中平調となり、強勢にしたがって、声門閉鎖、声門緊張を伴うか、あるいはどちらも伴わない。/'ʔi'ká./ [ʔi: 55 kaʔ 33]《水》。

5-3) 声調類の対立について：以上の記述からもわかるごとく、六つの声調類のすべてがすべての環境において常に対立するとは限らない。ある環境においては、ある声調類は対立しなくなる。どの環境において、どの声調類が対立し、またどの声調類が対立しなくなるかという関係をまとめると下記のようなになる。

- (1) /'—./, /'—!/, /'—:/, /'—/ においては6個の声調類のすべてが対立する。
- (2) /'—/, /'—s/, /s'—/, /—s/, においては第Ⅲ声調類と第Ⅳ声調類とは対立しない。前三つの環境では [55.3~55.3 |] であり、後者では [55.2] である。
- (3) /—/, /—s/, /—s̄/, /—s̄/, /—s̄/ においては、第Ⅰ, Ⅱ, Ⅴ声調類は共に [11.1~11.1 |] で対立せず、第Ⅲ, Ⅳ, Ⅵ声調類は共に [55.1~55.1 |] で対立しない。
- (4) /—s̄/ および /—s̄/ においては、第Ⅱ, Ⅴ声調類は共に [11.1] で対立せず、第Ⅲ, Ⅳ, Ⅵ声調類は共に [55.1] で対立しない。
- (5) /s'—/ においては、第Ⅰ, Ⅱ, Ⅴ声調類は共に [11.1] で対立せず、第Ⅲ, Ⅳ声調類は共に [55.1] で対立しない。

これらを表記するには、ラフ・ナ語では声調類の変化は音素論的に自動的に判明するから、対立のなくなる環境においても、対立する場合と同じ表記を行なってさしつかえない。例えば、/'—S/ においては、/'lǎ've./《加える》における /'lǎ-/ の声調と /'lǎpa/《月》における /'lǎ-/ の声調とは共に [55.3] であって対立しない。しかし、/'lǎ-/ が /'lǎ-/ と同じ [55.3] になるということは、/'—S/ という環境から判明することであるから、これら二つの音節は元通りに、/'lǎ-/ および /'lǎ-/ と表記してよいということである。²³⁾

II 他の分析/記述方法について

数通りの正しい分析/記述方法が可能になるのは、えてして、分布の限定された音素においてである。そこで、I章において設定した音素の中で、分布限定度の高い音素を選ぶと、次の

23) これら音素論的表記の再定義は、後の機会に形態音素論 (morphophonology) においてより詳しく述べるであろう。

ようなものがあげられるであろう。²⁴⁾

/pfu, phfu, bvü, mvü/, /tsu, tshu, dzu/ /ue, uε, ua/, /ʔ, ʔ/

これらの音素について、I章に示した以外の処理方法について順を追って以下に記することにする。

1. /pfu, phfu, bvü, mvü/ [pʰfʷ, pʰfʷ, bv, ʔm]

これらの音素を、音声学的により忠実に解して、/f, v, m/ を音節子音 (syllabic consonants) とし、/pf, phf, bv, ʔm/ で表記する。これにより、/—u/ にしか立たないという限定された分布の音素結合を除くことが出来るであろう。しかし、そのかわりに、/p, ph—/ にしか立たない /f/, /b—/ にしか立たない /v/, /ʔ—/ にしか立たない /m/ という限られた音節子音を設定しなければならないだろう。また [ʔm] を /mv/ と解すれば、音節子音として現われ得るのは /f, v/ のいずれかであり、前者は /p, ph/ のいずれかとのみ、また後者は /b, m/ のいずれかとのみ、それぞれ、結合するという、かなり均整のとれた分布になるだろう。これによれば、/f/ は初頭子音および /p, ph—/ における音節子音として、/v/ は初頭子音、/b, m—/ における音節子音、末尾子音として、それぞれ、現われることになる。また [ʔm] を /ʔm/ と解すれば、/v/ は /b—/ においてのみ、/m/ は /ʔ—/ においてのみ音節子音たり得ることになる。しかし、いずれにしても、以上の立場に立てば、I章に設定した以外の音節構造を立てなければならなくなる。/pf, phf, bv, mv/ あるいは /pf, phf, bv, ʔm/ という構造の音節が出来、これは音声学的にはより忠実であり、ある目的のためには、このほうが都合がよいかもしれない。²⁵⁾ しかし、本稿では、音節構造を二通り設定することをさけて、I章におけるような解釈を下した。

2. /tsu, tshu, dzu/ [tsʰ, tsʰ, dzʰ]

これらに関しては、根本的には1.と同じ考えに立ち、/ts, ths, dz/ と解し、/s, z/ を音節子音とするのである。ただし、このためには、硬口蓋子音の /š, y/ を設定せず、そのかわり、/s, z/ を立てなければならない。さらに /Vy/ を /Vz/ あるいは /Vi/ に、/CyV/ を /CzV/ あるいは /CiV/ としなければならないだろう。結果としては、破擦音は存在しないことになる。これを1.と総合すれば、音節子音として現われ得る音素は /f, v, s, z/ となり、/f/ は /p, ph/ のいずれかと、/v/ は /b, m/ のいずれかと、/s/ は /t, th/ のいずれかと、そして /z/ は /d/ とのみ、結合することになる。また [ʔm] を /ʔm/ と解すれば、/v/ は /b/

24) 以下にあげる以外の音素についてももちろん他の処理方法は可能なのであるが、ここでは、他の処理法が可能であることの最も著しい点のみを取り上げたのである。

25) 比較言語学的研究、対照言語学的研究 (contrastive linguistics) 等においてである。例えば、アカ語には [ʔm, ʔm] といった形があり、これは /ʔm, hm/ と解せられるが、ラフ・ナ語と比較する場合、アカ語 /ʔm/ [ʔm: 11]《空》とラフ・ナ語 /mvû/ [ʔm: 53]《空》とを比較するよりも、ラフ・ナ語の [ʔm: 53] を /ʔm/ として比較をしたほうが便利であるかもしれない。これにより /ʔm/ という形は両者とも同じであり、声調類 /ʔ/: /ʔ/ のみを比較すればよいことになるからである。

とのみ、/m/ は /ʔ/ とのみ結合する音節子音として現われる。これらのうち、/f, s/ は初頭子音としても現われ、/v, z/ は初頭子音のほかに末尾子音としても現われることになる。さらに /z/ は初頭子音結合の第2要素としても現われる。ただしこれは、/CzV/ および /-Vz/ を設定した場合のみであって、もし /CiV/ および /-Vi/ を立てれば、/v, z/ も他の子音と同様に、初頭子音および音節子音としてのみ現われることになる。2. は1. と同じ解釈にもとづくものであり、いずれも音節構造を二通り設定しなければならなくなるため、本稿ではI章のような解釈を取り、/ts, tsh, dz/ という一つのまとまった破擦子音音素を設定し、これらおよび /pf, phf, bv, mv/ という子音結合は /—w/ にのみ現われるという限定をつけたのである。

3. /ue, uε, ua/ [ũ^we, ũ^wε, ũ^wa]

これらを /ve, vε, va/ と解する。これらについては、いずれの方法を取っても大差ないであろうが、I章においては、[ũV]における[ũ]を初頭子音結合の第2要素 /v/ と解すれば、これは子音となり、どの母音にでも先行し得るはずであるが、実際は前舌母音の /ə, ε/ および中舌母音の /a/ としか結合しないという点を考えに入れて、これらの[ũ]を母音 /u/ と解したのである。もし、I章における方法を取らずに1, 2, および3における方法をすべて取ったとしたら、これらの音素の分布は次のようになるであろう。/f, v, s, z/ はすべて初頭子音として現われるほかに、音節子音としても現われ得るが、/f/ は /p, ph/ のみと、/v/ は /b, m/ のみと、/s/ は /t, th/ のみと、/z/ は /d/ のみと結合する。さらに /v/ は、初頭子音結合の第2要素として /C—e, ε, a/ に、および末尾子音として /V—/ に現われる。/z/ も同様に初頭子音結合の第2要素として /C—V/ に、また末尾子音として /V—/ に現われる。ただし、これは [ʼm] を /mv/ と解し、[CⁱV] を /CzV/ と解し、また [Vō~Vō] を /Vv/ と解し、[Vē] を /Vz/ と解した場合の話である。I章の方法から、1, 2, 3の方法を総合した方法にいたる間の中間的な方法をとることも考えられる。例えば、/—w/ にしか立たない独立した破擦音を認めるが、1.の方法をとり、/s, z/ を音節子音として現われ得る音素と解するなどである。それぞれの目的なり必要に応じてどの方法をどの程度までとるかにより、言語の音素体系も変わってくるであろうが、記述を統一させておく限り、一つの方法を別の方法にとりかえることは、大して困難なことではないだろう。

4. /ʼ, ʻ/ [ɪ^ʔ, ɛ^ʔ]

これら二つの声調類は末尾子音を有する音節には起こらないという点で限定された分布を成す。そこで、[ɪ^ʔ] および [ɛ^ʔ] における [ʔ] を末尾子音 /-ʔ/ と解して、残った [ɪ] および [ɛ] を、それぞれ、第Ⅱ声調 /˘/ および第Ⅲ声調 /˙/ にまとめてしまい、[ɪ^ʔ] を /˘ʔ/ と、また [ɛ^ʔ] を /˙ʔ/ とする方法である。これは、音声学的事実により忠実であり、しかも声調類を二つ減らすことが出来るという利点がある。しかし、/ʼ/ は /ʼṣ—/ においては [ɛ^ʔ] から [ɜ^ʔ] に変化するから、もし /ʼ/ を /-ʔ/ とすれば、第Ⅲ声調の中で末尾子音 /-ʔ/ を

の知る限りでは、未だ出ていない。しかし、EおよびFにおけるラフ族は、いずれもDあるいはCの地域からタイ国内に入ったものであり、Eの地域においては、現在でもDとの交渉は密接であり、言語的にみても、あまり大きな相違はないと考えてよいだろう。いろいろなラフ語の中で、Dにおいては、ラフ・ナ語およびラフ・シ (La^h hu shi) 語のみが正書法を有する。したがって、本稿でも、このDにおけるラフ・ナ語の正書法について述べる。最近DからEへ移住した者の中にも、この正書でもって文通可能な者が、少数ながらいることは確かである。詳細な相違を除けば、Eにおけるラフ・ナ語も、この正書法を有するDのラフ・ナ語と大差ないとみてよいであろう。

1. (1), (2), (3)のラフ語について

ラオスのラフ語については、J. Monpeyat, “Notes sur les Mousseux de la province de Muong-sing (Haut-Laos Occidental),” *R.I.*, n.s. 4, 1905. に語彙が発表されているとのことであるが²⁷⁾、私は未見であるので、全然わからない。この他にも、いくつかの旅行記等の類に断片的な語彙や文が記録されている可能性はあるだろうが、よくわからないし、はたして言語の構造を知る手がかりになるかどうかは非常にうたがわしい。ビルマのワー州におけるラフ語についても、Dのそれと違うのかどうか、違ふとすればどのように違うのかといったことについては、資料が出ていないために何もわからないけれども、この地域のラフ族でも、正書法を用いる場合には、Dにおけるそれを用いているようである。²⁸⁾ 中国雲南省のラフ族は主として Lan-ts'ang La-ku Autonomous County, Menglien Thai-Lahu-k'a-wa Autonomous County, Keng-ma Thai-k'a-wa Autonomous County に居住し、中国政府により言語調査が行なわれ、ローマ字による正書法が定められており、現在それを改良中であるということ以外には、詳しい情報がない。²⁹⁾ なお、中国語では、ラフは、傣黒あるいは拉祜により表わされている。中国政府の力により、ラフ語だけでなく、他の少数民族言語についても、広く調査されていることと思うが、今のところ、詳しいことはわからない。Henri d'Orleans, *Du Tonkin aux Indes*, Paris, 1898. にはいくつかの言語の語彙が提せられており、その中にはラフ語も含まれているように言われるが³⁰⁾、実際は、ラフ語ではなくて、雲南省における同系統の言語のひとつだと言える。

2. (4)のラフ語について

ラフ・ナ語以外に、ラフ・シ語にも正書法があるが、私の手許に資料がないのでよくわから

27) Robert Shafer (ed.), *Bibliography of Sino-Tibetan Languages* (Wiesbaden : Otto Harrassowitz, 1957) による。

28) Mr. Ca Law, Mr. Ai Shi に直接聞きたただしたものである。

29) Richard K. Diao, “The National Minorities of China and Their Relations with the Chinese Communist Regime,” *Southeast Asian Tribes, Minorities and Nations*, ed. by Peter Kunstadter, Vol. I (Princeton University Press, 1967).

30) Robert Shafer, *op. cit.*

ない。Henry Rudolph Davies, *Yünnan, the Link between India and the Yang-tze*, Cambridge, 1909. の語彙, C. Morgan Webb, *Census of India*, Vol. II, Part 1, Report, Rangoon, 1911. における親族語彙は未見であるが、この年代の書物の一部を成す語彙の類は、通常、言語を知る上ではほとんど役に立たないものである点から、これら二者もあまり使えるものではないであろう。また、よく引用される Linguistic Survey of India も、短い概略的説明を提しただけで、実際の言語資料は収録していない。多少ともまとまった数の語彙類を含むものとして、James George Scott, *Gazetteer of Upper Burma and Shan States*, Part 1, Vol. 1, Rangoon, 1900. がある。しかし、これも、声調の記述がなく、また全体に不統一であったり、記録者の考えちがいと思われる点があったりして、言語研究には役立たない。例えば、《thick, to be》として〈tu〉および〈twa〉の二つが上げられているが、これは二つの形があるのではなく、後者は〈tu〉プラス〈-a〉であり、この〈-a〉はパーティクル（仮にそう呼んでおく）と考えられる。《thick, to be》としては〈tu〉一つで充分なのである。《lowland fields》としてあげられた〈timite〉は、実は、《lowland fields をたがやす》という意味であり、〈timi〉と〈te〉とに分けられるべきものである。《to dance》の〈pwé te〉も、本当の意味は《祭(〈pwé〉)を行なう(〈te〉)》であり、直接《踊る》を意味するものではない。本書の語彙類は、ラフ・ナ語だけでなく、アカ語、リス語等のそれを見ても、いったいに上記の類の不統一が多く、これを何らかの意味で使用する際は充分注意してかかればならないだろう。いずれにしても、たいして使用にたえるものとは言えない。C. B. Andisdel, “Elementary Studies in Lahoo, Akha (Kaw) and Wa Languages,” *JBR*, 1, Rangoon, 1911. は著者もことわっているごとく、実用的な目的のためのものである。最初に英語の単語をあげ、それに相当する上記3言語の語彙を提し、それらの語彙を使って、記された英語の文に当たる意味の文をつづったものである。本書の表記も言語の研究に役立つ性質のものではないが、ここに記された文そのものは正しいだけでなく、非常に自然で口語的な生きたラフ語であって、英文に合わせて取ってつけたものではないと言える。私の知る限りでは、最も正確であり、量的にも多いのは、J. H. Telford, *Handbook of the Lahu (Muhso) Language and English-Lahu Dictionary*, Superintendent Government Printing and Stationary, Rangoon, 1938. である。Dの地域で用いられている正書法は本書のそれである。この正書法は後に Adult Education Sub-Committee of Burma, *Lahu Li, Lahu Ya Jaw Tu Ve Li*, Rangoon, 1959 において、わずかな改良が加えられただけで、現在に至るまで使用されているものである。Handbook は文法および語彙集から成るが、その記述方法はヨーロッパ語の文法範疇にラフ語をあてはめてゆき、それにはずれるものは“Lahu Idioms”として列挙してある。だから、文法の記述方法としては言語学的ではなく、それによって言語の構造なり特徴なりを知ることが困難であるけれども、そこに用いられている材料およびその表記法は高度に正確であり統一

のとれたものである。だから、これをよく検討し、うまく使うことによって、言語調査の助けとすれば、ずっと能率を上げることが出来るであろう。Lahu Li のほうは、すでにラフ語を話しているラフ族に読み書きを覚えさせることを目的としたもので、単語とあまり長くない文とから成り立つ。本書の表記法は根本的には Handbook のそれと同じであるから、本稿では後者のそれを中心に説明を進める。なお、前者における例文は、教科書という性格上、多少とも人為的 (Artificial) なところがあるので、これを現地調査の手がかりに使用する際は、その点に注意しなければ、自然な言語資料を得る上でかえってさまたげになるおそれがある。

この Handbook の正書法と私の音素表記との対照を示すと次のようになる。左行が音素表記である。

p…………p	pf…………pf	ph…………hp	phy…………hpy
phf…………hpf	b…………b	bv…………bv	m…………m
mv…………mv	f…………f	v…………v	t…………t
th…………ht	d…………d	n…………n	ts…………tc
tsh…………ts	dz…………tz	l…………l	(r-)…………(r)
c…………c	ch…………ch	ñ…………ny	š…………sh～s
y…………y～z	k…………k	ky…………ky	kh…………hk
g…………g	ŋ…………nŋ	<u>k</u> …………k'	<u>kh</u> …………hk'
g'…………g'	?…………(無表記)	h…………h	以上初頭子音
-i…………i	-e…………e	-ε…………eh	-i…………ui
-u…………ui～ue～uh～g'e		-a…………a	-u…………u
-o…………o	-ɔ…………aw	-ue…………we～wi～ui	
-ue…………weh	-ua…………wa		以上中核母音
-ŋ…………n	-y…………i	-w…………o	(-k)…………(k)
			以上末尾子音
/ (無記号) /…………無記号		/˘/…………—˘	/-/…………—-
/˘/…………—˘	/˘/…………—˘	/˘/…………—˘	以上声調類

以上、かなり規則的に対応し、この正書法は高度に言語の音素体系を反映しているものと言えるであろう。一つの音素が二つまたはそれ以上の文字によって表わされる場合について、次に説明を加える。/s/ は <sh～s> によって表記されているが、これは、<sh> は /—i, e, ε, u,

o, ɔ/ における /s/ を, <s> は /—w/ における /s/ を表わしたものであり, /—a/ における /s/ は <s~sh> により自由交替的に表わされる。この最後の場合については, 借用語 (主としてシャン語) の場合に <s> が多く用いられ, その他の場合には <sh> が用いられる傾向がある。しかし, これらの表記上の区別は, 私の調査結果では音素論的区別を反映したものではなく, /—a/ における /s/ は, <s> および <sh> とともに [s] であることがわかった。あるいは, これらの借用語が入ったところには, 借用語として本来のラフ語とは異なった発音を有していたが, 次第に本来のラフ語音素に同化したのかもしれない。/ʃa'ti./ [ʃa: 33 tiʔ 11]《知覚》における /ʃ/ も /ʃa've./ [ʃa: 22 ve: 33↓]《たやすい》における /ʃ/ と同じく [s] であるが, 表記法のみが <s> と <sh> に分かれており, 前者はシャン語からの借用語だと考えられる。/y/ に対する <y~z> は, /y/ の異形態 [z] と [j] とを表記分けしたものである。すなわち, /—w/ における /y/ を <z> で, その他の場合の /y/ を <y> で表記している。/w/ については, /pf, phf, bv, mv, ts, tsh, dz—/ における /w/ はすべて <uh> で表記し, その他の場合は <ue~ui> である。ただし, <ui> で表記されたものには /w/ のみならず /i/ も含まれているので, これについては後述する。<g'e> は /p, m—/ における /w/ の一部を表記したものである。実際には, 私のフィールド・ノートに関する限り, /ʔə'mu./《粉》, /—'pũ./《一飲み, すすり》, /'vâ'mu./《霧, 霞》のみににおける /w/ が <g'e> で表記され, ただ一つ /'mvũ'thĩ 'pũ've./《ひらめく》における /'pũ/ のみが <pg'o.> と表記されている。また, ただ一つ /'chuě've/《打》のみが <chui> で表わされている。これらの表記法の相違がかつて存在した何らかの音素論的対立を反映したものなのか, あるいは, 本書の取りあつかう方言と私が調査したそれとの相違によるものなのかは, いまのところ, 何とも言えない。/ue/ は <wi~we> で表記されるが, これは, 音素論的には何らの区別をも表わしたのではなく, 全く表記上の混乱にすぎない。/'tuě've./《こする》, /'šué've./《すぐれている》等は <wi> で /'tue'mũŋ./《パイナップル》等は <we> で表記されている。/w/ に対する <ui~ue> については, 現在 <ui> で表記されているものの中には, 実際は /w/ であるものが多く存在し, むしろ /i/ は少ないと言えるので, 少し問題がある。上記 Handbook および Lahu Li においては, <ui> および <ue> の表記法は一致しており, Handbook における <ue> が <ui> に, あるいはその反対に書きかえられた例はない。両者とも <ui> で表記されたもので, インフォーマントについて聞きただしてみると, それらは /w/ を表わしており, したがって <ue> で表記されるべきだと言うものが多数出てくる。例えば, <aw, suh kui~>《死体》, <mi, ha kui~>《がけ》, <mi, gui~>《地》, <pui~ ve>《能力がある》, <hpui ve>《つなが》, <bui, ve>《沸騰する》, <kui~ ve>《腐る》, <g'ui, ve>《からかう》等ほか多数である。これらについては次の二通りの考え方が出来るであろう。すなわち, もともとは <ui> : <ue> により表記される音素 /i/ : /w/ がはっきりと対立していたが, 最近になって /i/ が /w/ に

同化し始め、元の /i/ の多くが /w/ との対立をうしない始め、現在でもその過程が進んでいる。いま一つは、上記2書が取りあげた方言では /i:/ /w/ の対立は現在でも存在するが、私のインフォーマントの話す方言、つまり東北部シャン州で北部タイの国境よりの地域で話される方言、においてはこの対立がなくなりつつあるという解釈である。Handbook と Lahu Li との間では正書法の変化は見られず、両者ともチェントゥン地域のパンワイ-ルウエムウエ (Pang Wai—Lwe Mwe, Pa We—Lwe Mwe) あたりの言葉を対照にしている点から、おそらく後者の解釈のほうが当たっていると言えるであろう。

以上は音素についてであるが、かぶせ音素の類については、Handbook, Lahu Li 共に表記されていない。両者とも、未定義の句読点が随所適宜に用いられているだけである。ただ Handbook においては〈一:〉という記号があり、これは中長型声調 (“Middle Long Tone”) とされているけれども、実際の言語に当たってみると、これは実は声調類とは関係がなく、かぶせ音素の環境によって音節が長くなった場合にすぎないことがわかる。長さは、この言語では、自動的特徴であって、弁別的特徴ではない。本書で〈一:〉の用いられている音節、例えば、〈Yaw[˘] kan⁻ te: pui⁻ ve:〉 /'yô 'kân 'te'pū've./ 《彼は仕事をしてしまった》における〈ve:〉 /'ve./ は長いけれども同じく〈kan⁻ te: pui⁻ ve: la[˘]〉 /'kân 'te'puve'lâ./ における〈ve:〉 /ve/ は〈一:〉であっても強勢がないから短いのである。音素論的には区別されない〈一:〉は Lahu Li においてはすべて取り除かれている。一方、Lahu Li においては Handbook には見られなかったものとして〈一> が加えられており、声調類であるかのように取り扱われているけれども、これもかぶせ音素の環境によるもので、音素論的には対立するものではない。例えば〈ta⁻ve〉 /'ta've./ 《置く》は、/ta/ が第I声調であり、/'—'S./ という環境に立つから、音声学的には [ta: 22] となるのであって、別の声調類を有するわけではない。音素論上は〈一> の表記は必要ではない。以上のように、この正書法は、相補的分布の原則を適應する一步手前の段階の音を表記し、未定義の句読点以外には、かぶせ音素の表記はなされていないけれども、その反面、かぶせ音素の影響による音声学的特徴が〈一:〉あるいは〈一> により書き表わされているということが出来る。また、わずかな表記上の不統一を除けば、忠実に言語の構造を表わしていると言える。従って、これらの点を留意すれば、Handbook, Lahu Li およびこの正書法そのものも、現代でも充分使用にたえるものだと考えて正しいのである。

参 考 文 献

- Adult Education Sub-Committee of Burma C.C.S. *Lahu Li, Lahu Ya Jaw Tu Ve Li*, 3rd ed., Rangoon, 1959.
 Antisdell, C. B. "Elementary Studies in Lahoo, Akha (Kaw) and Wa Languages," *J.B.R.S.*, 1, Rangoon, 1911.

- Davies, Henry Rudolph. *Yunnan, the Link between India and the Yang-tze*, Cambridge, 1909.
- d'Orleans, Henri. *Du Tonkin aux Indes*, Paris, 1898.
- Kunstadter, Peter. *Southeast Asian Tribes, Minorities and Nations*, Vol. 1 & 2, Princeton University Press, 1967.
- Lebar, Frank M., Gerald C. Hickey and John K. Musgrave (eds.) *Ethnic Groups of Mainland Southeast Asia*, New Haven: HRAF Press, 1964.
- Lefevre-Pontalis, P. "Notes sur Quelques populations du nord de l'Indochine," *J.A.*, 8-e, Ser. 19, 1892.
- Monpeyat, J. "Notes sur les Mousseux de la province de Muong-sing (Haut-Laos Occidental)," *R.I.*, n.s. 4, 1905.
- Scott, James George. *Gazetteer of Upper Burma and Shan States*, Part 1, Vol. 1, Rangoon, 1900.
- Seidenfaden, Erik. "The Gospel of St. Marc in Musso," *J.S.S.*, 24, Pt. 1, Bangkok, 1930.
- Shafer, Robert (ed.) *Bibliography of Sino-Tibetan Languages*, Vol. 1, Wiesbaden, 1957.
- Taylor, L. F. *Linguistic Survey of India*, Vol. 1, 1904 & Vol. 2, 1928.
- Telford, J. H. *Handbook of the Lahu (Muhsö) Language and English-Lahu Dictionary*, Superintendent Government Printing and Stationary, Rangoon, 1938.
- Webb, C. Morgan. *Census of India*, Vol 1, Pt. 1, Report, 1911.